

滞西雜記(二)

——ローマにて——

大 島 正

アテネ出発は三月一八日午後六時四五分ごろのエチオピア航空(ET七〇六便)のはずであったが、この便では一行三〇名全員が乗れないことが判った。

そこで約一時間後に出るアリタリア機を利用することになった。この間、添乗員の努力は大したものであったようだ。僅かな外国語の知識で要領よく交渉する彼は見上げたものだ、思った。

旅行会社の添乗員という職業はいくらやっても将来報われることの少ないものである。若いうちはまだいいとしても、普通に家庭を持つようになればどういうことになるのだろうか。

家庭を留守にすることでは、船乗りに似ている

のだが、添乗員には海員組合のような強力な労働組合もない。だから経営者のさじ加減で首のすげ替えなどは日常茶飯事であるようだ。

旅行中にその添乗員の生活と意見を聞いてみた。添乗員とは給料をもらって、世界旅行ができるという特典があるだけで、その他はなんのとりえもない、若いうちだけの職業だというのだ。

一種の放浪癖のようなものがないとできないのである。旅行会社というのは絶対に大企業にはなり得ない存在であり、小さな旅行会社は自社の添乗員をかかえていない。添乗員を臨時に雇入れるだけらしい。そのうえ、無理を押しつけられることもある。およそ青年にありが

ちな野心を一切放棄したかに見えるわが添乗員は「将来のことは考えない。そのうちなんとかなるでしょう。」とひらき直っていたが、心底そう思っているのかどうか。

アリタリア機はいわゆるジャンボではなく機内の通路もややせこましい感じである。暗くなったアテネのエアリコン国際空港を離陸すると間もなく機内食が配られた。スチュワーデスの服装は日航のそれに比べるとすこしくたびれた感じで、日本娘のような微笑はなく固い態度である。

日本では空の旅が現在ほど一般的でなかった一〇年すこし前ぐらいは、旅客機のスチュワーデスという職業は若い女性の憧れの的であり良家の子女の応募者も多かったと聞いている。四年制大学卒業生も数多く応募したので航空会社にはよりどりみどりであったし、訓練もできた。

しかし、欧米諸国では旅客機のスチュワーデスは日本

の女性が憧れるほどの職業ではない。スチュワーデスと英語でいうから、日本人の耳にはなんとなくもっともらしく聞えるのであるうが、翻訳すれば女給仕、女給サンなのである。女給といえば戦前のカフェの女給を連想してしまう。

スチュワーデスという婦人の職業は戦前の日本にもあることはあった。それは鎌倉丸、氷川丸など、日本郵船の大型客船に乗組んでいた女性の給仕のことであった。主として婦人の船客やその子供の世話をするのが仕事で、一船に七、八名はいたと記憶する。私は太平洋戦争がはじまる前に日本郵船に入社して、客船の次席事務員として、船舶乗組員をさせられたことがあるので、こんな妙なことを知っているのだが、遠洋航路の大型客船のない現今、こんなことを知っている者はほとんどいないであろう。

ただし、この種のスチュワーデスは現在の日航機などのスチュワーデスのように若くて学歴も高い女性ではなかった。どんなに若くても二〇才台の後半か三〇才をす

きた女性が多かった。船に乗組んでくるまでの経歴は種々雑多でどちらかというところ、人生の表も裏も知り抜いているという感じの女性であった。中にはなかなかの豪の者もいて、かの女らの居室——三、四名が一室にいたように思う——に所用のため出むいて行くと、浴衣がけの立膝で花札をいじりながら「あら会計サン遊んでいきなさいヨ。コーヒぐらい入れたげる。」などと若い私たちをからかうという有様で、用事がすむとただちに退散せざるを得なかった。

戦前の客船のスケジュールと戦後の旅客機のそれとはまるで種類が違うのだと割切ってしまうばそれまでのことだが、仕事の内容は似たようなものである。前者がついに婦人の職業として花形とならず、ややもすれば軽くみられたのに対し、後者は花形となった。

日本が空の自由を取り戻すまでには戦後一〇年近い歳月を要したし、日本航空など航空会社は外国人旅客の印象をよくするためにスケジュールの質の向上に努力したのである。また、海外へ旅立つことの容易でなかつ

た日本から短時日の中に世界各国へ出かけられるという、この職業が若い女性に魅力があったことも事実である。外国語を話して外人客と対応するということも好奇心をそそいたらしい。かつての教え子の女子学生の中にもスケジュール志願者が幾人かいたが、みんな同じようなことを理由にあげていた。外国へ旅立てるといっても、外国の空港に滞在できる時間は長くはない。その間に観光し得る限度はしれたものである。幾度か同じ空路に就航すると、馴れてしまつて新鮮味はなくなる。これは遠洋航路の船乗りにもいえることであつた。しかし、スケジュールに憧れている間は考えてもみない未来のことなのである。

とにかく、いまでも日航のスケジュールの志願者は採用人員の数十倍というからすごい。こういう現象は東南アジアを含め、アジア諸国の航空会社に共通であるらしい。逆に欧米諸国の場合は女性の憧れの高級な職場？とは銀行や海運会社であつて、旅客機のスケジュールはやや低くみられる職業であるようだ。

アジア諸国に共通する、このような女性の職業観は興味ある現象である。短絡的に結論するのははばかられるが西歐的、近代化に遅れたアジア諸国には、かつての侵略国西歐諸国の文化に対する畏怖と憧憬がないまぜになった、屈折した感情が働くのであろう。

さて、機内食だが、コールドビーフまがいの肉二片が主皿でパンとチーズなどがついていた。エコノミー・クラスなのでアルコール類は有料である。食事前には、日本の旅客機ではおしぼりを出す、ヨーロッパの旅客機では、そんな心づかいはない。湿気の多い日本の習慣では手を拭わずにはおれない。一日中埃っぽいアテネの街を廻った後なので、手でパンをちぎるのにもなんとなく不快感がともなった。おしぼりを使わなくても別段どうということはないのだが、永年の習慣というものはこわいものである。

ちようど隣の席にイタリア人らしい女性が乗っていたが、機内食はまずいのか、あまり食べていなかった。かの女にアテネに住んでいるのか聞いてみると、そうだと

うなずく。食前に胸に手をあて、十字をきっていた。キリスト教徒の習慣といってしまうばそれまでであるが、目のあたりに見るとまことに敬虔な態度にみえてくる。

空港には夫が迎えに来てくれるはずだとこやかに話していたが、私のスペイン語は耳ざわりだったかもしれない。関西人が東北弁を聞くような感じであったろう。

ローマのレオナルド・ダ・ヴィンチ空港に着陸後、座席の上の棚から外套を取り出すとき、ついでにかの女も取ってやったら、「グラツェ」（ありがとう）とこやかに会釈し、いそいそと降りて行った。

夜八時すぎであったろうか、空港はとても暗かった。入国手をすませ、迎えるバスに乗ったのは九時近くであった。バスに乗ってしまうと女子学生たちはさすがに疲労を感じたとみえてぐったりしている。ローマ市中央の暗い街道をバスが走り出すと、乗り込んできた案内人二人がローマ観光地図を配った。この二人はどうやら留学生らしい。身元を聞く余裕はなかったのはつきりしたことは言えないのだが、どうやらそのような感じで

あった。留学生は大学その他の機関から留学費をもらっているのと、私費でただらと滞在しているのと二通りある。後者にはただヨーロッパの大都市に憧れてずると何することもなくいついてしまうのが多いので、日本人観光客相手の案内が主な仕事になる。そして、完全に留学の目的を失い、その日暮しをするだけの存在に成り下がる。ローマの二人はどちらに属するのかよく判らなかつた。

地図には「ようこそローマへ」(Venvenuti a Roma. Welcome to Rome.)と伊英二ヶ国で書かれていた。案内人は翌日の観光予定をざっと話してローマは観光客にとって恐しい都会だと注意をはじめた。現金をふんだんに持っている日本人が特に狙われ易いから気をつけないといけないなど、被害例をあげながら女子学生たちに諭した。車中の薄あかりで地図を開いてみると「スリひつたくり、置引に御注意下さい」という注意書がある。それは日本大使館が出した注意書六ヶ条と称するもので、

昭和五一年一〇月一二日付読売新聞の記事の転載であつ

た。

①「タクシー、どうですか」と日本語で呼びかける空港のタクシーに乗らないこと、法外な料金を請求したり荷物をわざと積み残したりする。

②現金は何ヶ所かに分散してもつこと。

③ホテルで夜中にドアをたたきたくものに注意。開けたら三人組の強盗だったこともある。

④安く上げようと夜行列車を使うと、寝込んでいる間にすられることあり。

⑤繁華街で、日本語、英語で話しかけるものに注意。

⑥女性の夜間独り歩きは絶対に禁物。

このような注意書が日本人観光客に配布する地図に刷りこんであるのは恐らくイタリヤだけであろう。ほかではついぞ見受けなかつた。また、この地図は日本料理店や日本人経営の土産物屋など四軒で作製したもので、大使館が発行したものではない。日本人観光客のために大使

館がわざわざ注意をうながすということはないのだ。

日本人を顧客とする日本人経営の店は、日本人が盗難にあえば、それだけ購買力は落ちることになり、経営にはね返ってくる。それが注意事項を刷りこませた原因かもしれない。治安のよさに馴れている日本人は、話には聞いていても、ローマ滞在中に自分自身に不幸が起り得る可能性に直面すると緊張せざるを得ない。女子学生たちは地図を見ながら不安な面持であった。

一〇時近くになってバスはホテルに着いた。モンテチトリオ広場 (Plaza Montecitorio) のホテル・ナチオナーレ (Hotel Nazionale) である。このホテルはかつて貴族の邸宅であったという。部屋に備付けの家具類はいずれも、おもむきがあるのだが、脆い感じである。寝台は体を動かすたびにぎしぎし音がするし、敷布なども日本のホテルのように清潔でなく、室内灯も薄暗い。

一風呂浴びてさっぱりしたのはいいのだが、排水が悪くてお湯が中々流れないので気持が悪い。

翌一九日朝九時から市内観光ということになっている

ので、寝台にもぐり込んだがなんとなく寝つかれない。

眠りは浅かったようで、早朝に目がさめてしまった。小鳥の啼き声が耳につくので、窓をすこしあけてみると裏庭がみえた。窓はがたぴしで壊れかかっている。窓の外には古い鉄のパイプがむき出しになっていて、湯水らしきものが流れる音がする。地面にはごみがたまっていて、雀がとび廻っていた。こういう風景がヨーロッパの古都なのであろうか。日本の戦前の宿の裏庭も似たようなものであった。だが、高度成長以後、古めかしい旅館も四角な鉄筋の建物になってしまうと、画一的に整頓されてしまって、ホテル・ナチオナーレのような間の抜けた汚らしさがなくなってしまい、歴史を感じさせなくなってしまう。

旅籠屋の名にふさわしい、一昔前の宿の手入れの行き届いていない庭の片隅、樹木には旅の者の想像力をかき立てる何かがあり、処によってははるばるも来つるものかとは、思い入れのできる風情があった。

ローマのホテルの薄汚れた裏庭を眺めているうちに日

本にいるときには思いもつかなかったことがふと頭をかすめた。近代的と称する建物の機能性と清潔さは、はじめは居住性に利便を感じさせても、次第に何かを失っていくようだ。

睡眠不足の頭も冷たい水で顔を洗うと、ややすっきりした感じになる。七時半ごろから朝食がとれるので食堂へ降りて行った。

女子学生たちも、はじめてのヨーロッパのホテルの一夜はなんとなく寝苦しかったであろうが、すこし眠れば若さのせいで疲労などは消しとんでしまうのであろう。みんな案外元気そうである。やはり年のせいか、家内はすこし落ちこんでいる様子。日本を離れて僅か三日目のに米のめし、が食べたいといって、真空処理をした、かやくごはんのパックをもってきて給仕に熱湯をもらってほしいといってきた。仕方なく頼んでみたら、熱湯ではないのでうまく処理できない。今夜日本料理屋でなんとかしてもらってやるからといってなだめた。

観光バスは定刻ちょっと過ぎにホテルの前にやって来

た。はじめにトレヴィの泉 (Fontana di Trevi) に案内されることになった。この泉は、大分前にオードリ・ヘップバーンの「ローマの休日」の画面でみたことを思い出した。そのことを家内に話すと「いいえ、わたしはそんな映画見たことはありません。映画へなど昔は連れて行ってくれたことはないじゃありませんか」とうらめしそうに言う。「変なところでカタキ打ちするなよ」と言い返したら、うしろで聞いていた学生たちがくすくす笑っていた。

途中の街角で屯している二、三人の警官に出会った。アメリカ映画のギャングを思わせるようなのが一人いたので、カメラを向けたらげんな顔をした。制帽と腰の拳銃が妙に大きくて、ものものしいというよりも、柄が悪くみえる。

ローマには数多くの泉と噴水があるが、トレヴィの泉は最も有名である。この泉は三叉路 (Tivolo) にあるので、トレヴィの泉と呼ばれるようになったという。

この泉が作られたのは一八世紀。時の法王クレメンテ



トレヴィの泉

一一世〔Clemente XI〕（一七〇〇～二一）が公募した噴水のコンクールで一位となったニコロ・サルヴィ〔Niccolò Salvi〕（一六九七～一七一五）の設計である。

完成したのはクレメンテ一三世（一七五八～六九）の時代であったというから、相当の時日を要したわけである。噴水はパラッツォ・ポーリ（Palazzo Poli）という建物の中央の凹部、龕（がん）のようなところに位置している。海神ポセイドンが貝殻の馬車の上に立ち、頭と胴体は人間で魚の尾をもつその息子トリトーネ二人が岩礁の間を荒れ狂う二頭の馬を駁するというもので、いずれも大理石の像である。

これらの像はまことに颯爽たるもので、ギリシヤ神話の知識がなくとも石像の姿態そのものが、見る者の目を楽ませしてくれる。

ピエトロ・ブラッチ〔Pietro Bracci〕（一七〇〇～七三）の作という大理石像の乳白色は周辺の建物とよく調和し、噴水の水の流れとともに歴史的な美しさを感じさ

せる。

トレヴィの泉が有名になったのは、バロック風な彫像の美しさよりも妙な伝説による。

それはこの泉の縁に後向きで立ち、肩越しに硬貨を二枚投げることなのである。最初の一枚では「またローマへ来られること」を、二枚目のときには「その願いがかなえられるように」と祈って投げるわけだ。

泉の中をのぞくと、世界各国のさまざまな硬貨が投げこまれているのが判る。青味がかかった泉の水底に硬貨がぎっしりつまっている。投げこまれた硬貨は一体どのようにならされるのだろうか。これは聞きもらしてしまつた。年に一度ぐらいは拾い集めて貧困者救済の資にでもするの、勝手な想像を試してみた。しかし、小銭ばかりで、外国の硬貨も混っているから大した額にはなるまい。

いずれにせよ、こういう風習がいつごろからできたものかよく判らないらしいが、ローマの住民の誰かが言いだしたことであろう。このすばらしいローマをまた訪れ

ることができるようにと願って硬貨を泉に投げるといふ風習を作り上げたローマの市民というのは中々のしたたか者である。奇習であるだけに旅行者には伝播し易い。こんな他愛もないことを多くの人々が、さして考えもせずに行うところに人間の不思議さ、面白さと同時にこわさがある。この種の社会的現象を考察してみるのも無駄ではないのであろう。煽動政治家とか民衆煽動家つまりデマゴグ (demagog) は、トレヴィの泉の式の大衆行動を悪用するのだと思う。ファシズムの行動様式もこれであつたと考えられる。この泉の奇習は政治に結びつかなかつたので救いがある。

だが、これは牽強附会であると批判されるかもしれない。日本の大都市の地下街に出現した泉の広場と称する処でも硬貨を投げこむのがある。これはローマへ、パツク旅行をしたことのある若者が真似ただけだと軽視できないうようにも思える。

東アジアのどこかの国にこれと同じ風習があつたとしても、日本の若者たちはこれを模倣するだろうか。それ

がローマにあったから日本に伝播した。あいも変らぬヨーロッパ指向かと思うと淋しくなるのである。

女子学生たちは、案内人から聞いたとおりに百リラとか五〇リラなどの硬貨を喜んで投げていた。百リラをほうっても二〇円程度。五リラなら一円そこそこだからちり紙をすてるに等しい。

かの女たちにしてみれば、神社仏閣の賽銭とは違う意味で白銅貨を泉に投げこむのは新鮮な爽快さがあるのであろう。

一人をつかまえて「どう祈ったの？」と聞いてみたら「それは秘密です」とにやにや笑っていた。型の如く「またローマに来れますように……」とつぶやいたのではなさそうだ。

己が目の前の彫像はギリシヤの海神であり、カトリックの聖者でも神でもない。カトリック教徒からすれば異教の神であろう。その前に硬貨をなげて己が願望のときられるように祈るといふのは異端の極ではないか、など

と思えてくるのである。

そこで、トレヴィの泉の硬貨投げ入れの風習をでっち上げた張本人は、カトリックの本山、ヴァチカンの権威に対する反抗から、あのようなことをなにくわぬ顔で喧伝したのではないかなどと考えてみた。

設計者、彫刻家ともにこんな考え方はなかったであろうが、泉の完成後にこれを舞台に反カトリック的な誰かが言いはじめ風俗化するという経過は考えただけでも面白い。ただし、こういうかんぐりをする輩は、世が世ならば神を恐れぬ者として焚刑に処せられたかもしれない。

エホバの神に対する信仰を一途に守れと教える法王庁のお膝元で、ギリシヤ神話の海神に祈りを捧げることになる、習俗ができてしまったことは、はなはだ皮肉である。

恐らくローマの市民たちは、そのようには毛頭考えたことはないであろうし、ヨーロッパ各地からやってくる旅行者たちも同じであろう。

異教徒の私の目には、そこにヘレニズム的なものとへ

ブライズムのものとの見事な混合があると映るのだ。ヨーロッパ人がこれを否定しても、そう主張するところに東アジア人としての私の自己証明（アイデンティティ）があるのだと思っている。

トレヴィイの泉について勝手なことを思いめぐらせている中に時間がきてしまった。いくら硬貨を投げても、再度来れることはなからうと思ひ私はついぞ投げ入れなかった。

市内観光は午後二時までなので、くまなく名所旧蹟を廻るといふわけにはいかない。バスはヴァチカンへ向って走った。

チッタ・デル・ヴァティカーノ (Citta del Vaticano) すなわちヴァティカン市国は世界最小の独立国である。人口約千人。貨幣を作り、切手も発行している。貨幣、切手ともにイタリア国内で通用、単位はイタリアと同じくリラ。イタリア・リラとは一対一の交換率である。ヴ

ァティカンの百リラ硬貨には法王の肖像が刻まれているが、旅行者は見のがしてしまう場合が多い。

ローマ市内の法王国はまさに小国寡民であるが、法王は全世界の五億五千万にのぼるカトリック教徒を統括し君臨するだけに、絶大な影響力をもっていることはここにあらためていう必要はないであろう。

一九二九年二月一日に、イタリア政府と法王庁との間にとりきめられた、ラテラーノ協定によって、現在の独立国、ヴァティカン市国が誕生した。満州事変勃発の二年前、ムッソリーニはファシスト党をひきいてローマ進軍を敢行した後であった。

法王はムッソリーニとうまく取引したという、うがった考えもなり立つであろう。この協定によって独立国の体裁を整えた法王庁はファシスト党と無駄な摩擦を避けたであろうし、ムッソリーニ側も同様の利益を得たと考えられる。

宗教上の權威と政治的権力の見事な妥協であろうが、ローマ皇帝がキリスト教を公認して以来の伝統的な平衡

関係である。

その面積は約四四ヘクタール、モナコ公国の三分の一、日比谷公園の三倍の大きさでしかない。独立国となつてからは、法王庁と特別の関係にある、ローマ市内のサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会 (San Giovanni in Laterano)、サンタ・マリア・マッジョーレ教会 (Santa Maria Maggiore)、サン・パオロ・フォーリー・レ・ムーラ教会 (San Paolo Fuori le Mura) とかローマ郊外のカステル・ガンドルフォ (Castel Gandolfo) という小さな町にある、法王の夏の宮殿 (Villa del Papa) の他、幾つかの建物については治外法権が認められているという。

ヴァティカン市国の表玄関ともいうべきサン・ピエトロ広場 (Piazza San Pietro) の前で貸切バスを降りると、正面にサン・ピエトロ大聖堂、右にヴァティカン宮殿 (Palazzo del Vaticano)、広場の中央にはすばらしいオベリスクが見える。



サン・ピエトロ広場

三月一九日(木)の午前中はなぜかいつもより巡礼者、観光客がすくなかった。案内人の話によると、日によってはこの広大な広場は立錐の余地もないほどだという。私たちにっては幸運だったわけだが、見物できる時間は二時間足らずでしかない。

案内書には、見学時間はすくなくとも半日は必要であるのに、二時間そこそこでは駆け足見学である。

まず最初にサン・ピエトロ広場にバスから降り立ったとき、その壮麗さには息をのむ思いがした。その後、マドリーを中心にくつかのヨーロッパの都市を見ることがになるが、この広場からの眺めのような華麗さはどこにもなかったように思う。大きな円蓋(Cupola)をのせた大聖堂の左右には四柱列の楕円形の回廊が広場を取り囲んでいる。この回廊は二八四本の円柱と、壁に組みこまれた八八本の片蓋柱で構成されているが、大聖堂の上には一二人の聖者の彫像が飾られているばかりでなく、回廊にも彫像があり、これら全部で一四〇を数えるという。

ひとときわ目立つ広場中央のオベリスクは高さ二五・五メートル、古代ローマ帝国三代のカリグラ帝(三七〇四一)のころエジプトから運びこまれたものだという。この広場の中央に据えられたのは一五八六年。左右に見事な噴水があり、右側の噴水は一七世紀に高名な建築家マデルノの作で、左側のは一八世紀に作られたものである。これで左右の平衡がとれることになった。

ところで、オベリスクと左右の噴水の間には白い石がはめこまれている。その石の上に立って回廊を眺めると四本の柱列が一本にみえるから不思議である。案内人に教えられて、立ってみるとそのとおりなので驚いた。

回廊の設計者は一七世紀の著名な建築家ベルニーニ〔Gian Lorenzo Bernini〕(一五九六―一六八〇)である。彼は彫刻と絵画にもすぐれバロック派の代表といわれていた。多才であったればこそ、このような巧みで味のある設計をなし得たのであろう。

回廊の建築には一六五六年から一一年の歳月を要したといわれている。スペインの文豪セルバンテスは一五六

九年、二二才のときにローマへ来ているが、噴水もオベリスクもまだなく、回廊にいたっては、彼の死後四〇年余を経過してのことであるから、あの見事な柱列の景観をみることはできなかった。

彼は小説の中にもローマのすばらしさを書いていますが、回廊の完成を目にすることができたら、どのように書いたであろうか。はるかに後世の私たちには、想像が許されるだけである。さらに、案内人の説明によると、右側のヴァティカン宮殿、ちょうど回廊の上に見える建物の中に法王の書斎があり、その最上階の右から二つ目の窓から、日曜日の正午になると、法王が現われて、広場に集った人々に祝福を与える。すると人々は拍手をもつてこたえ、まことにほほえましい光景だという。

だが、それから二ヶ月後にポーランド出身の法王ヨハネス・パウロ二世に対する暗殺未遂事件が起ころうとは思ってもよらなかった。

マドリー郊外の集合住宅で新聞をひろげて、この事件を知ったときは本当にびっくりした。



サン・ピエトロ大聖堂

その日から新聞にパウロ二世の病状が報道されない日はなく、有力なカトリック教国スペインの関心の深さをまざまざとみせつけられたものである。

三月の広場の空は青く澄みきっていた。その空のもとからサン・ピエトロ大聖堂の中へ入っていくと、一瞬手さぐりで歩まねばならぬか、と思うほどである。暗さに目が馴れてくるのにそう時間はかからない。

正面に法王ピオ六世〔Pius VI〕(一七七五～九九)の像、最上部に十字架をのせた天蓋のある法王の祭壇、聖ペテロ〔Petrus〕(六七〇)の司教座などがみえ、一番奥の聖ペテロ司教座とドームの上には明星を思わせる灯が崇高な輝きをみせている。

内部は大ぴらには撮影禁止らしいのだが、外国からの旅行者はこのときとばかりにカメラを向けている。私もそれにつられてシャッターを押した。

そこかしこにある蠟燭は揺れ動くだけで、壮麗であり、仏教寺院の灯明と同じ感じである。日本の大寺院の

規模は、この大聖堂とは比較の対象にはならないが、カトリック教会とはどこか雰囲気共通したものがあるようだ。

大正の末年に来日した、スペインの作家ブラスコ・イバニェス〔Vicente Blasco Ibáñez〕(一八六七～一九二八)は京都の本願寺の早朝の読経を聞いて、スペインかイタリアのカトリック教会でとなえられるミサに列席しているのかと思ったと書いている。ことに食料の買物籠を傍において坐り、低い声で僧侶の読経に唱和する婦人の声がみな、ラーラーと聞え、その理解できない経文に神秘性とミサとの類似性を感じたらしい。(ある作家の世界一周—La Vuelta al Mundo de un Novelista, 1925)

ミサが始まったのか、聖職者の行列がみえてきた。長い蠟燭がたてられた黄金色の燭台を捧持した聖職者が目立った。右隣には小姓といった感じの少年が長い竿の如きものを捧げる。



大聖堂の行列

とき色、白色などの僧服をまとった聖職者のうち、とき色のガウンをまとった者が、赤色の丸い房のついた黒い帽子を胸にあてて歩む。この行列は長年月の間に秩序、美的効果がおのずと計算され、信徒に対しては宗教的な感銘つまり法悦を与えてきたに違いない。

さて、全世界のカトリックの総本山、サン・ピエトロ大聖堂は初代のローマ法王ペテロの墓の上に、三二六年ローマ皇帝コンスタンティヌス一世〔Constantinus I〕(三二一―三三七)の敕命によって建立された。そこに建立したのは聖書マタイ伝一五章一八の聖句「我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐(いは)の上に我が教会を建てん、黄泉(よみ)の門はこれに勝たざるべし」に拠るといふ。ここにいうペテロは磐 \parallel 岩の意味である。法王ペテロと聖句中のペテロとをかけた解釈と受けとれカトリック教徒でない者にはなんともいえないこじ付けに思えるのだがそれをすらりと信じてしまうところに信仰があるのであろう。

その後、紆余曲折があつて、一四五二年法王ニコラウ

ス五世〔Nicolaus V〕(一四四七～五五)により再建命令がだされた。それから半世紀もたってから一五〇六年に、法王ユリウス二世〔Julius II〕(一五〇三～一三)のころ、ブラマンテ〔Donato d'Angelo Bramante〕(一四四四～一五一四)の設計によって工事が始められたが、途中で他界したため、一五四六年にはミケランジェロ〔Michelangelo Buonaroti〕(一四七五～一五六四)が工事監督者として作業を進めることになった。彼はブラマンテの設計案を基礎にして、四辺が同じ長さの十字、ギリシヤ十字架型の平面を考え、壮大な円蓋の設計をした。だが、彼も工事着手後一八年目には死亡した。とはいえ工事はかなりのところまでできていた。恐らくセルバンテスも完成に近づきつつある、この大聖堂を見たことであろう。

それから、法王パウルス五世〔Paulus V〕(一六〇二～二二)の意見でギリシヤ十字架型からラテン十字架型—普通の十字架—の平面に変更されることになった。工事監督にマデルノ〔Esteban Madero〕(一五五六～一

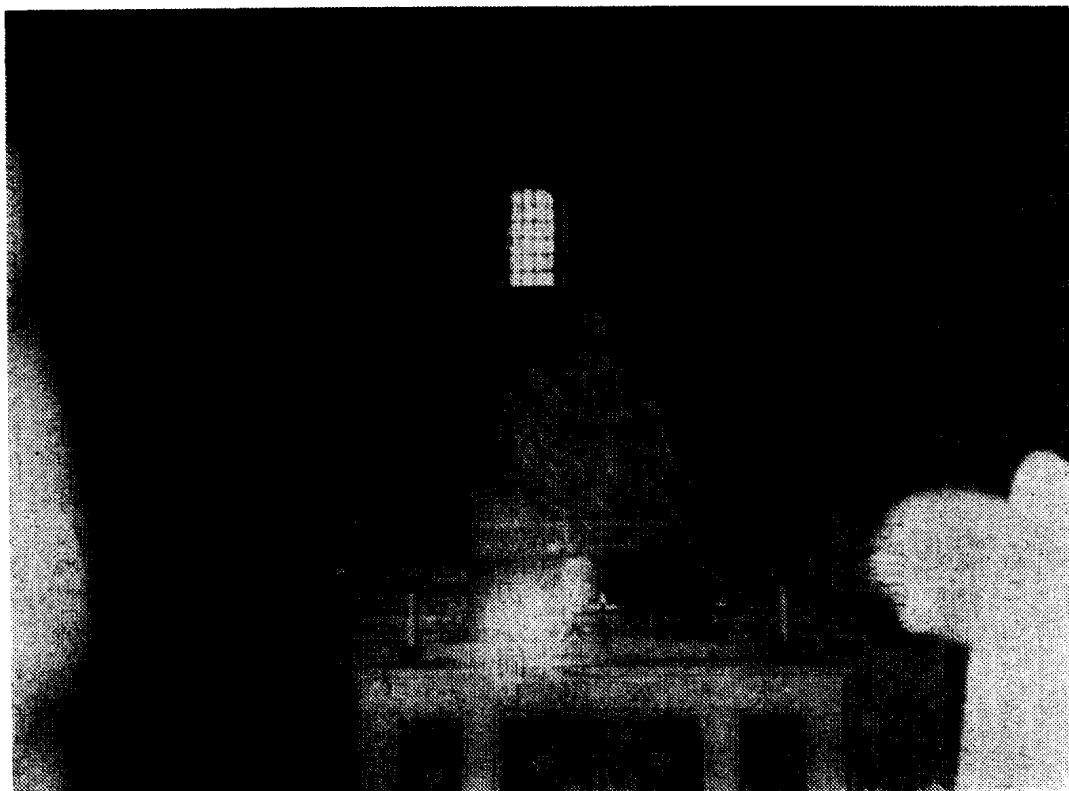
六二九)が任命された。彼は法王の意をうけて大聖堂の前廊部を長くした。いま大聖堂の柱廊玄関をはじめ右側廊と左側廊はマデルノの設計によるものである。

一六二六年法王ウルバヌス八世〔Urbanus VIII〕(一六二二～四四)の時代にやっと献堂式が行われた。

このような次第で、サン・ピエトロ大聖堂は計画されてから一三〇〇年余の長きにわたって工事がなされたのであるから、一枚の敷石にすら、人間の努力と智能と信仰の力が凝固しているようである。

壮麗と壮嚴、これに類する、あらゆる形容詞を冠しても、表現しきれないように思える。そしてローマ法王の教権の絶大さを思うと、おのずから威圧感のしかかってくる。

それを威圧感と感ぜずに、ただひたすら敬虔にひざまづくところに純朴なる信仰の境地がある。それができない者どもは縁なき衆生としか言いようがない。こうした縁なき衆生の中には絶大なる教権による信仰を破壊しようとする輩が出てくることがある。



ピエタ像

右側廊を入ってすぐの礼拝堂には有名なピエタ像 (Pietà) がある。これはミケランジェロが二五才の時の作と伝えられる白大理石のマリア像である。十字架から降ろされたイエスを膝の上に抱きかかえ沈痛な面持の像で、やや青味がかって見え傑作といえよう。この像を破壊した若者があった。一〇年ばかり前のできごとである。

法王庁はこれを狂人の仕業としたらしいが、単なる気違いであったのだろうか。中世ほどカトリックの権威はないといっても、日本の仏教などとは比べものにならないくらい、カトリックは世界各国にずしりと根を下している。

最近のポーランドにおける「連帯」とヴァティカンとの関係を考えてもおよその見当はつこうというものだ。

ピエタ像の破壊者が、たとえ怪し気な思想の持ち主であったとしても、破壊の理由が明らかになることは法王庁にとって得策ではない。狂人として片付けてしまうほうが無難であつたらう。

もつとも、こう考えること自体が下司の勘ぐりであつて、法王庁からは狂人扱いにされかねない。

とにかく、法王庁は不死身なのだ。ヴァティカンという名称は二つの意味をもっている。ヴァティカン市国も法王庁もヴァティカンと称せられる。

仮に市国がなくなつても、法王庁は存続するはずである。法王庁が生き残ることは法王も存続することを意味する。

そのように国際法上、特殊な地位を認められているのだ。〇〇王国が消滅すればその国王は国王でなくなり、国外へ逃亡すれば一介の亡命者でしかない。

それにひきかえ、法王は全く異なる存在であり、まさに魂の王国の王なのである。

ところで、大聖堂の結構について、さきに書き洩らしたことを二、三補足しておきたい。現在、正面は三層の階段になっているが、一六世紀後半のものといわれる。ヴァティカン所蔵のフレスコ画では四層になっている。

一層減少したのはいつごろ、いかなる理由によるのか、不想議な気がする。ただし構造的には今日の大聖堂とほぼ同じであるようだ。大円蓋の前面の上部の中央に、十字架をもつ彫像はキリストであろう。ヨハネ、ペテロなど使徒の像が並ぶが、その左右には時計があり、まことに美しい左右相称をなしている。

宗教的祭日になると法王は、正面入口の中央、二本の柱の間にあるバルコニーに姿を見せ、広場に集る群衆に祝福を与える。日曜日には書斎の窓に姿をあらわし祝福を行うことはさきに述べたが、毎週の行事と、祭日の行事とでは祝福を与える場所が違っている。やはり大聖堂の正面からというほうが、盛大にみえるからであろう。このように細心に神経を使うことがあればこそ、永年にわたる教権の維持が可能となるのであろう。

ヴァティカンについて考えるとき、これなどは氷山の一角にすぎないのかもしれない。王と名のつく存在には暗い裏面もあるが法王庁の裏面史をあばき立てるような史書は表面にはあまり出てこない。

ヨーロッパの各王朝の歴史は、特に裏面史と、うたわなくとも普通に書くだけで、おのずと暗黒面がついてまわる。

法王については、もしあっても正史には露骨に記述されることはない。地上の王権と人間の魂に対する教権との違いであろうか。

それでも法王選挙にまつわる習慣には、考えさせられるものがあるようだ。法王は終身制であるから、死亡による以外は新法王の誕生はない。法王選出の選挙権は枢機卿 (Cardinale) が握っている。

枢機卿による法王選出会議のことをコンクラヴェ (Conclave) という。これは、鍵をもって、という意味であるが、選出会議の際、会議室には鍵がかけられ外部と遮断される。全くの密室の中で法王選出が行われるわけで、外からの干渉を排するというのが理由である。これはもっともらしい理由だが、小数の枢機卿団の専断に任された法王選出ということでもある。

これが「地上」の政権交替の選挙であればたちまち批

判的となるであろう。

神に代って愚かなる人間に祝福を与える法王には、民主主義などというのは俗人の世界に属するものであって、通用しないらしい。

ところが、ポーランドの「連帯」が危機におちいると、法王は地上のものであるはずの、ある種の政治的危殆に救済の手を差しのべようとする。どんなものにも、理由はつけられるが、ややこしい話である。

とにかく、法王さまというのは「地上の王以上に「王」である一面をもっておいでのようだ。」

法王選出会議の行われる場所は、大聖堂の右隣のシステーナ礼拝堂 (Capella Sistina) で、選出が決定するまで一日に二回行われる。出席者の三分の二に一票を加えた得票が法王選出に必要な票数とされており、決定の際は投票用紙を焼くときに白煙をあげて、大衆に知らせるが、未決定の際は黒煙をあげるのだという。

煙による告知というのは意味深長にみえる。ことに未



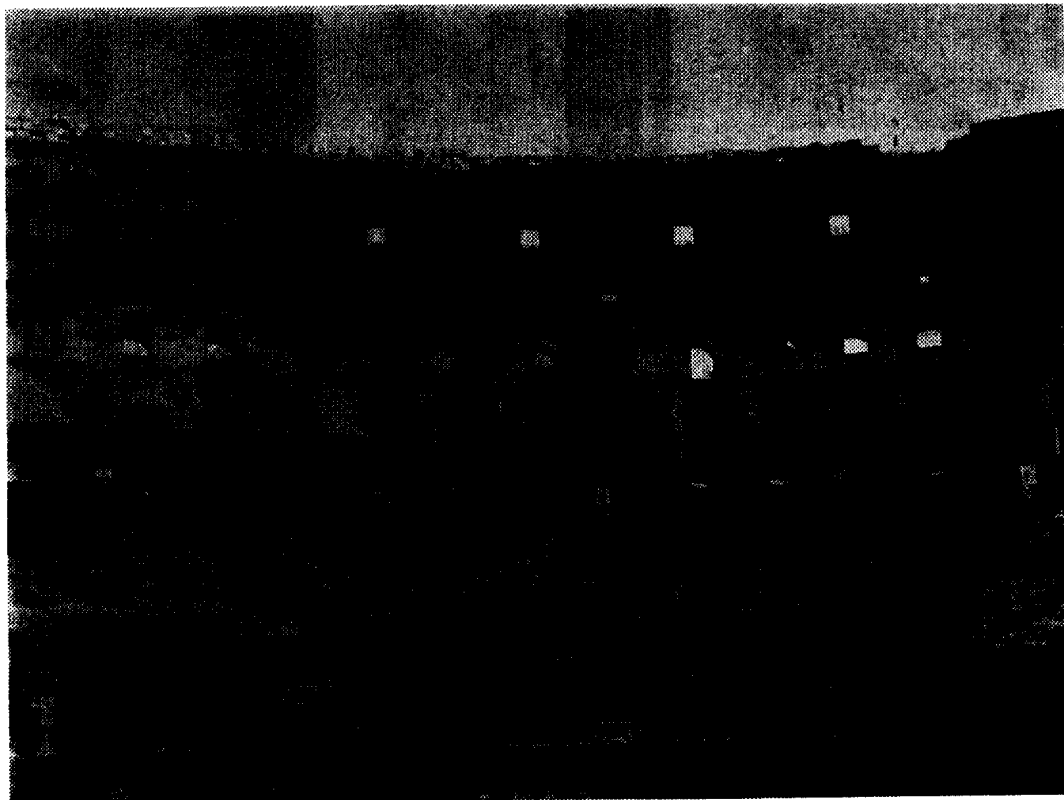
ヴァティカンの番兵

決定の場合の黒煙は、前途多難を象徴するようでもある。

ヴァティカン市国とローマ市の境界はあってなきが如きものであるが、昔からのならわしとはいえ大聖堂の左側、鐘塔の下の衛兵所のスイス人の番兵は人目を引く。その制服はミケランジェロの考案した意匠だという。ということは一六世紀の流行である。まことに色彩豊かで、三月では黒いガウンのようなものを着ていた。長槍を構えた姿を見ていると時間が逆に回転しているような錯覚におちいる。

古代の遺跡とか古い建築物を見ても、時間の逆転を感じないのだが、目前の人間が三百年も前の服装で勤務をしているのを見るとそう感じてしまう。

限られた時間内の観光だから多くの名所旧跡をみることはできない。かつて世界の都市の女王といわれたローマの美しさは広場の噴水と教会にあるのだが、古代ローマの遺跡は歴史の暗黒をのぞかせているようなものが



コロッセオ

多くて、半壊の建物の柱をみている中に、暗い気持ちになる。

コロッセオ (Colosseo) を目の前にしたときには特にこの感を深くした。コロッセオといえはすぐに暴君ネロ [Nero] (五四〜六八) が頭に浮かんでくる。

剣闘士同士の死闘、ライオンとの戦いなどが想像されるのだ。残存するコロッセオが廃墟と化しているだけに、ことさらに凄まじさを増加している。

この楕円形の建物は長径一八八メートル、短径一五〇メートル、円周五二七メートル、高さ五七メートルの四階建である。

そして、一階から三階までには、ドーリア式、イオニア式、コリント式の柱列。二、三階のアーチには彫像が飾られていたという。また最上階には木柱を受けたりし石の台座が残っているところから、暑さを避けるためのテントが張られたものと推定されている。

中央のグラウンドの部分は長径八六メートル、短径五四メートル。いまでは露出していて、小さく区分されて

いることが判る。ここには器材が格納されたり、明らかに猛獣の檻と見えるところにはライオンなどを入れていたと思われる。このコロッセオが競技場として使用されていたところには、頑丈な板張りがなされていた。しかし、猛獣の咆哮は聞こえたであろう。廃墟と化した今でも檻らしき区画の上に立つときは不気味である。

下方の座席は大理石が張りつめられ前方には青銅の手摺りが取り付けられていた。上方の婦人席は木製の座席であった。大理石は冷たくて堅いが、木は柔らかいので疲労を感じさせない。ローマ人の女性に対する思いやりとでもいえるのだろうか。最上階は立見席で、下層民のためのものであった。殺伐な見せ物に興奮する見物人たちは剣闘士の勝者に相手のとどめを刺せというときには、一斉に片手の親指を下に示し、喚声をあげたという。

こういう雰囲気はいまでもスペインの闘牛場に残っているようだが、日本人には耐えられない感覚である。ローマの競技場の凄惨さを最も如実にえがいている、文学作品はヘンリック・シェンキーヴィッチ〔Henryk Sien-

Kiewicz) (一八四六—一九一六) の『クオ・ヴァディス』〔一八九五〕(Quo Vadis?) であろう。

暴君ネロ時代のキリスト教徒の殉教の物語である、この作品には読む者をして息づまらせるような場面が展開する。

ローマの大火によってネロは自己の地位が危なくなると、大火はキリスト教徒の放火だとして、キリスト教徒を一掃しようとはかる。

「頭は攪乱しているが、血で酔い狂っている観衆はしやがれて喚きはじめた。獅子だ。獅子だ。獅子を出せ。」

獅子は翌日の番組になっていた。しかし円戯場に於ては観衆の意志がすべてを支配し、皇帝と雖も之を拒む事が出来ない。只一人カリグラ皇帝のみは尊大で移り気であったから、それに反対した事があった。そして度々、棍棒で人民を殴れと下命した。しかしそのカリグラでさえ多くの場合は人民の意志に随った位であ

る。ネロは人民の拍手喝采をこの世の何よりも尊いものと思っていたので、決して彼らに反対しなかった。殊に大火の為に激昂している民衆の心を宥め、基督教徒を放火犯として罰しようと思っっている矢先であったから、一層寛大であった。

そこで皇帝は獅子の檻を開けと合図をした、それによって観衆は一時に静まり返った。獅子を収容した鉄門の軋る音が聞えた。

.....

しかし獅子は飢えていても急いで犠牲に襲いかかる事はしなかった。.....」

獅子がとき放たれる前に、すでに獯猛な野犬がキリスト教徒の犠牲者に襲いかかり、かれらの肉体を食い破っていたのだ。

「或る一頭が突然、顔を引き裂かれた女の死体に躍りかかった。前肢で死体を押えると粗い舌で固まり付い

ている血を舐めた。もう一頭の獅子は仔鹿の皮を縫い付けられた子供を抱いている男の方へ近寄って行った。.....〔獅子〕は短かい、鋭い咆哮を発し、前肢の一撃で幼児を殺し、両顎の間に父親の頭をくわえて瞬く間にそれを噛み砕いてしまった。

これが、外の獅子を基督教徒の群に飛びかからすべく合図となった。.....人間の頭が獅子の両顎の間に丸呑みにされた。前肢の一撃で胸が裂けた。心臓や肺臓が引摺り出された。ぱりぱりと骨を噛み裂く音が獅子の牙の間から洩れた。生餌の肋骨や腰骨をつかんで、何処かで匿れて独り思うがままに貪り食うために技場内を狂い廻っているものもある。.....」

(木村毅訳・新潮社)

まことに凄まじい光景の描写である。稲作民族である、日本人の頭からはめったに出でこない叙述である。しかし、このような凄惨な場面がみられたのは残存するコロッセオではなかったらしい。いま廃墟となっている

るところは、皇帝ネロが贅をつくした黄金宮殿の中央の人工池であった。ネロの死後、ウエスパシアヌス帝

〔Vespasianus〕(六九～七九)がこの池を埋立てして競技場をつくり、ローマ市民の娯楽に供しようとして工した。だが完成したのは息子のティトゥス帝〔Titus〕(七九～八一)の時代で紀元八〇年であったという。

キリスト教徒がライオンの餌食になった競技場はいま見ることのできる、コロッセオでなかったにせよ、構造はあまり違わなかったはずであるから、それを見ながら『クオ・ヴァデイス』の風景を十分にうかがい知ることができる。

いまではライオンの代りに捨て猫の棲み家となっている廢墟のコロッセオは月明の夜などはただ森閑として、亡霊の呻きが聞えそうである。

出入口の壁にはあちらこちらに消えかかって判読し難い落書があった。二度と出口から外へ出ることができな

いと悟った剣闘士の書いた今生の別れの文字か、亡霊の恨みの文字かともみえた。もし時間をかけて解読できた

ら意外な発見をするかもしれない。

さてコロッセオの意味のことであるが、この建物が巨大であったからという説と近くにネロの巨像(高さは三〇メートル余だったという)があったからという説の二説あるが、いずれにしても巨大(Colossale)というの関係があることには間違いないだろう。

古代ローマの市民が殺伐なショーに熱狂したのは、現代のローマ市民がサッカーの試合に熱中するのと同じではなかったか。

剣闘士の血み泥の決闘は四〇四年まで続いた。この年、競技場中央に降り立って、残酷な試合の中止を訴えた聖職者があった。これに憤った観衆は、彼に投石し打ち殺してしまった。この事件から、時の皇帝ホノリウス〔Honorius〕(三九五?～四二三)は救命をもって剣闘士の試合を中止したので以後、行われなくなった。また猛獣の演技は西ローマ帝国滅亡後も続き、終止符をうつ

たのは五二三年であった。

コロッセオから北のヴェネツィア広場(Piazza Venezia)の間は古代ローマの遺跡の缶詰の如き感がある。

ローマ帝国の最盛期の中心地だったフォロ・ロマーノ(Foro Romano)が目につく。フォロとは商取引、裁判、市民集会などに用いられた公共の大広場のことである。

キケロが演説したという演壇、シーザーが火葬された祭壇、捕虜や掠奪品を市民に誇らしげに示した將軍の凱旋門などがいまだに言い伝えられている。もし夏草が茂っているところに、その場所に立てばまさに、夏草やつわものどもが夢の跡である。

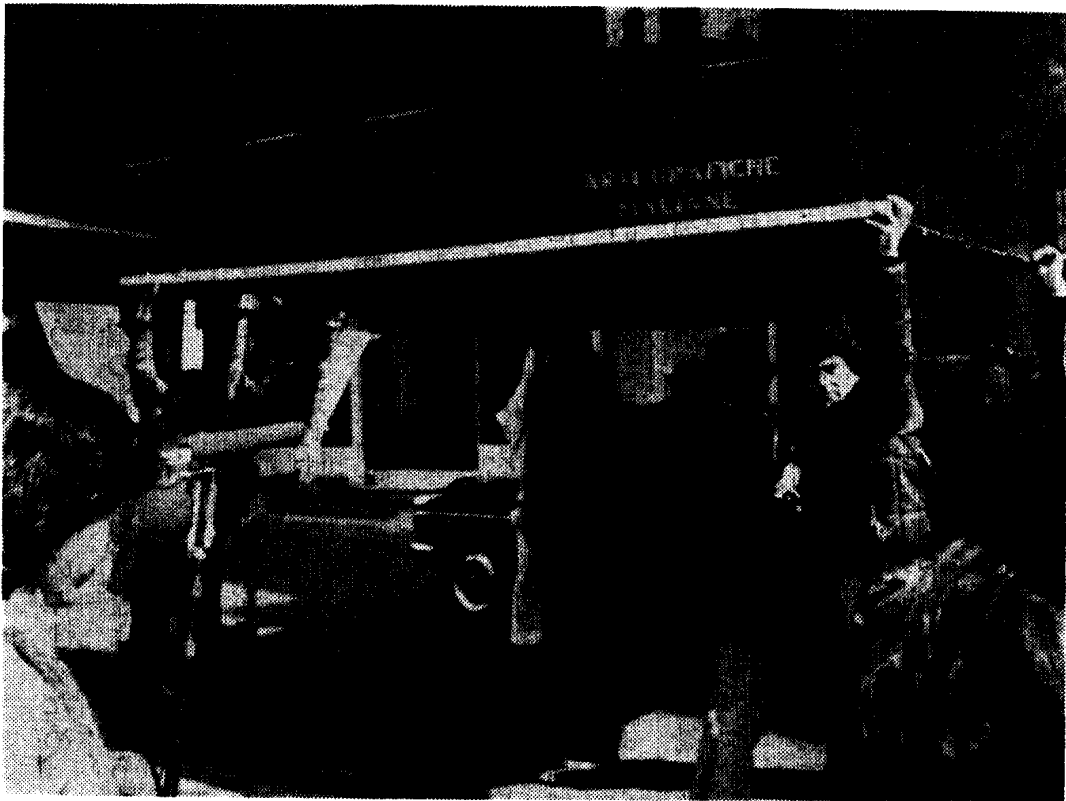
コロッセオのすこし南にはコンスタンティヌス帝の凱旋門(Arco di Constantinus) さらに南へ下るとカラカラ浴場(Terne di Caracalla)の遺跡があるのだが、日本で発行されている旅行案内書にあるだけの遺跡すらほとんど見て廻れなかった。

観光バスの中から案内人が早口でまくしたてる説明と、建造物とを見較べるのは意外に困難である。同行の女子学生たちは、ローマ史にも西洋史にもあまり興味がなさそうであった。

わずかに興味を示したのは、トレヴィの泉であったろうか。

このような手合では案内人も張り合いがなからう。小さな旅行会社にはそこが付け目である。真面目な観光なんかはあまり考えずに専ら買物をし易いように時間をとる。

最後にバスはカメオ専門店の前で停った。女子学生たちは熱心に陳列棚をのぞきこみ、安くて買得な品を手に入れようと懸命の努力をしていた。古代ローマ以来の伝統的な女性の装飾品である、カメオはピンク色で浮彫の良否の鑑定は素人には難しいはずなのだが、かの女たちは歴史の知識よりも、買物の予備知識のほうがはるかに豊富であったようだ。それから先もいろいろな土産物店で思い知らされることになる。



ローマのロケ風景

私と家内はカメラには興味がなかったので表へ出た。すると、どこかの映画会社のロケが目についたので、カメラを向けると、制止されたが、ちょっとしたすきにシャッターを押した。自動車の上にテントの如きものをスタッフが四人がかりで持ち上げ、車の内から人がでくるといふ、ワン・カットであったようだ。

私たちが見ていたのは、いまはその名を思い出せない泉の広場であったが、そこにあるギリシヤ神話の彫像と現代劇の撮影風景とがまことに面白い対照をなしていた。

現代のローマ市の特徴は種々の対照がみられることであろう。コロッセオから北西ヴェネツィア広場に至る街路は、ムッソリーニ時代に完成した、皇帝のフォルム通り (Via dei Fori Imperiali) で、この街路に沿って、さきに述べたフォロ・ロマーノのほかにも、多くの古代ローマ皇帝の遺跡がみられる。恐らく地下にはまだフォルムすなわち公共の広場が埋没しているのであろう。

ムッソリーニがああ街路を作り上げたのはイタリアを古代ローマ帝国のように、強力なものにするため、民衆にかつてのローマ帝国の栄光を回想させようという意図があったのであろう。

かつてムッソリーニがローマ市民に演説をしていたという建物の前を、バスは通りすぎた。彼が腕を振り上げ獅子吼したバルコニーにはなにかの紋章入りの旗がかけられていた。

そこをすこし過ぎた街角の名もない半壊の建物の窓にカーテンが風に揺れているのが見えた。案内人の話によると、相当古い建物だがまだ人が住める余裕があると、勝手にどこかの家族が住みついてしまう。それをローマ市当局も見つて見ぬふりをしているのだという。そして、その前をドアのないおんぼろの自家用車が走り去っていった。

いずれもイタリアならではの話であるが、これを聞いて驚いたというよりも、全くあっけにとられてしまった。

ヴェネツィア広場からエマヌエーレ二世通り (Via Emanuele II) を西へ直進して同じ名の橋を渡れば、すぐヴァティカンである。

テヴェーレ (Tevere) 河をはさんで東と西とでは全く対照的である。すでに述べたように東側には古代ローマの遺跡がかたまって存在し、西側にはカトリック総本山のサン・ピエトロ大聖堂が厳然と建っている。東側はギリシャ文明を伝承した古代ローマの跡であり、西側はキリスト教文明の精華である。

そこにヘレニズムとヘブライズムの二大潮流の並列を私たちは見ることになるのだが、ヘレニズムを伝承した遺跡は、歴史的考察の対象でしかないが、ヘブルウ思潮から展開された、キリスト教の大本山であるヴァティカンは現代に根強く命脈を保っている。

今日、私たちがローマ市内にただ並列しているとみる、二つの思潮による文明も一世紀から四世紀までは、接触し、衝突した。

前述の『クオ・ヴァーディス』はヘレニズムとヘブライ

ズムの接触の際起きた、衝突を素材とした歴史小説なのである。

人間の現在性に根ざすヘレニズムと未来性を志向するヘブライズムが、はじめはともにあい容れないのが当然であつたらう。

キリスト紀元のすぐ後に衝突は起きた。一世紀も半ばをすこしすぎたころ、皇帝ネロは、ローマの大火の放火はキリスト教徒の仕業であるとして、ライオンの餌食にするなど残酷な迫害を加えたことはすでに述べた。

シェンキーヴィッチの大作はネロを中心に書かれたもので二つの思潮のぶつかりあいの状況を詳細にえがいている。

使徒ペテロが迫害を避けて、ローマを去ろうとするとき、アッピア街道 (Via Appia Antica) でキリストの幻影に出会う。「主よ、何処へ? (Quo Vadis Domine?) とたずねたところ、「汝が私の民を見捨てるなら、私はローマへ行ってもう一度十字架にかかろう」という答が返ってきた。

使徒は恥じてローマへ引き返していき、恐れず活動を続けるうちに、捕えられ処刑された。

十字架にかけられるとき、キリストと同じ形では恐れ多いといって逆さにかけることを願ったという。もっとも、この伝説はあの小説にはでてこないのだが、宗教学の題材にはなっている。

『クオ・ヴァディス』にえがかれたネロはまさに悪逆無道である。六四年の大火の時には海岸の離宮にいたが、大火の報を受けて直ちにローマへ戻り、罹災者の救援と市の復興に努力を惜まなかった。

だが、キリスト教徒に対する残忍な迫害が後世をして暴君ネロと呼ばしめるに至った。ネロは詩作と音楽を愛する文芸家肌の一面をもっており、ギリシヤまで出かけて行ったともいわれている。

ヘレニズム的な彼には天上の王国をという、未来志向のキリスト教を理解することはできなかつたのである。この点では、キリストを十字架にかけたピラトも同じであつたと思われる。現実主義的な古代ローマ人には

キリスト教の理解はなかなか難しいものであったに違いない。それでも、次第に増加していく無抵抗で清潔なキリスト教徒はネロの目には不気味なものと映ったのであろう。

いくら迫害しても根絶やしはできなかった。大火後の不安などが重なり、六八年には各地に反乱が起きた。

『クオ・ヴァーデイス』ではガルバなる者の叛乱が書かれている。これは六八年から一年間、ローマ皇帝になったガルバのことである。

ついに元老院もネロを公敵と宣言したため、彼は脱出せざるを得なかった。そして解放奴隷に手をそえてもらって死んだ。

小説におけるネロの最期ははなはだ皮肉である。彼の首に刃が柄までとおったとき助命の使者が到着した。

「生命をお助け申す報知を持って参りました。」と百人長は駆けこみざまに叫んだ。「遅い！」とネロは嘔れ声で言った。ややあってまた付け足した。「お前は

忠臣だ！」

死が彼の頭を捉えた。太い首から迸り出る濃い血が庭の草花に散りかかった。彼は両足で地面を蹴って死んだ。……………

ああ、ネロは旋風の如く、嵐の如く、火事の如く、戦の如く疫病の如くに逝いた。しかしペテロの礼拝堂は今日も尚ヴァティカンの頂からローマ市および全世界の上を支配している。(木村 毅訳)

この長編小説の末尾のようにキリスト教が全世界を支配するまでには、ネロ以後も相当の時日を要した。

ギリシャ文明を伝承したローマ帝国の主権者がヘブリウ文明の精華、キリスト教を圧迫するという関係が続いた。しかし三一三年コンスタンティヌス帝〔Constantinus I〕(三一―三七)の時、ミラノ敕令により、キリスト教が公認され、両者の間に協調がなりたったかに思えたのも、つかの間、ユリアヌス帝〔Julianus〕(三六一―六三)が再びキリスト教を排斥したので協調は破れる

ことになったが、ついに五世紀に至って、ヘブリウ思潮全盛の歴史がはじまる。

セルバンテスがローマを訪れたときは、古代ローマ皇帝の建造物は廃墟と化し、法王の教権が、かつてのローマ皇帝の権力と同じ権威をふるっていた。

その『模範小説』(一六一三) [Novelas ejemplares] に収められた「びいどろ学士」[El licenciado vidriera] の主人公トマス・ロダーハ (Tomás Rodaja) がローマに到着して驚嘆するくだりは、セルバンテス自身の目に映ったローマの風景であったと考えられる。

「枢機卿会議の権勢と法王の尊さ、住民とさまざまな国の人々に目をみはった。」とか「くだけた大理石、半分か全部の彫像、壊れた拱門、くずれ落ちた公衆浴場、壮大な回廊、広大な円形競技場」などと古代ローマの遺跡にも注目「あらゆる都市の女王、世界の貴婦人ともいべきローマ」と讃辞をつらねている。

そのときの法王はピウス五世 [Pius V] (一五六六)

七二)。彼は厳格そのものであった。この法王はスペインのフェリーペ二世 [Felipe II] (一五二七～九八) にオランダのプロテスタントの反乱鎮圧を命じたりするほどの権勢をもっていた。一二世紀末から一三世紀初頭にかけての教権の絶頂期ほどではなくても、一六世紀の法王の権力は絶大であった。

四世紀ごろまでのローマの市民は想像もつかなかったであろう。セルバンテスがローマに感じたものは、今日、私たちがローマを訪れて感ずるのと大差はないのかもしれない。

そう考えると、治安は悪く、外国人旅行者には不安と不便はあっても、ローマという都市は永遠に世界の貴婦人と言うにふさわしいのかもしれない。

その日、三月一九日の夜はホテルから近い日本料理店「東京レストラン」まで歩いて出かけた。通りは薄暗く、通行人と衝突しそうになることもあった。

パック入りの赤飯を温めてもらおうと、日本を離れてわ

ずか三日目というのに家内は、一月ぐらい米を食べなかつたような顔で食べた。それを見てみると、これから先、一年、どうなることやらと私は、心細くなってしまう。

翌二〇日朝八時バスでフィレンツェへ向うことになる。